

# カメやカエルも喜ぶ田んぼ 身近な生きものが広げる取組



## キーワード

地方創生／官民連携／環境配慮型農業／  
水辺の保全・活用／食／ブランド化／  
健康・美容

## フィールド

近畿  
(滋賀県) ・ 里

## 実施体制

自治体（滋賀県高島市）／  
たかしま有機農法研究会／  
アマタ持続可能経済研究所／  
NPO法人民間稲作研究所／地元の小学生



## アクションの目的

かつてのように琵琶湖と水田を魚が行き来する環境を取り戻すこと。

## アクションの背景

2005年、市町村合併で高島市が誕生した際、市の中核事業の一つとして環境保全型農業の推進が掲げられたことを機に、市の職員の呼びかけで、環境に配慮した農法に取り組んでいた少数の農家が集まり、活動を開始。翌年、たかしま有機農法研究会が発足した。

## アクションの内容

### 【「たかしま生きもの田んぼ米」・ブランド化】

「たかしま生きもの田んぼ米」の条件として、以下の3点を実施。

- ①田んぼやその周辺にすむ「自慢の生きもの」を各農家が3種類以上設定し、その生きものとの共生策を実施。  
(中干しの延期、水田魚道、亀カエルスロープ、避難用ビオトープ水路、休耕田ビオトープ、冬期湛水水田のいずれか)
- ②農薬や化学肥料を使用せず、また畦草への除草剤も使用せずに栽培。
- ③ジャンボタニシ、合鴨、カブトエビにより除草や、紙マルチによる抑草を禁止。

また、育苗期、田植え直後、中干し前の年間3回に渡り、有機農法研究会のメンバー同士で農地を合同巡回し、栽培規定が守られているかの確認や、生きものの生育状況の調査を実施。

## アクションのポイント

◎トキヤコウノトリのようなトップスター的な生きものはいないものの、身近な生きものを大事にしながら活動を継続、展開している。

◎2009年より、たかしま生きもの田んぼ米1kgの購入につき8円を基金として積み立て、水田魚道やビオトープ設置など田んぼの環境づくりに充てるライスエイトアクションを米屋の提案で実施（米屋同士の呼びかけで、首都圏を中心に11店舗が参画）。

## アクションの効果と今後の展開

○ナゴヤダルマガエルが全く見られなかった田んぼで多く見られたり、絶滅寸前だったメダカが繁殖したり、身近な生きものが帰ってきている。

○インターネットや百貨店、首都圏や関西圏などの米屋において、慣行栽培米より高い単価で販売している。

○一般を対象とした田んぼの生きもの調査等を通して、地元の小学生や京都や大阪など都市部の人々との交流が生まれている。

たかしま有機農法研究会

〒520-1234 滋賀県高島市安曇川町四津川614(有)グリーン藤栄 内

○ TEL / 0740-20-1485 ○ web / <http://www.ikimonotanbo.jp/index.html>